書籍紹介

『日本の外来哺乳類　管理戦略と生態系保全』山田文雄，池田透，小倉剛編

2011年12月　東京大学出版発行

449頁　定価6510円

浅川満彦（酪農学園大学）

獣医大関係者が，今，もっとも大きな関心を寄せる課題の1つが，「獣医学教育モデル・コア・カリキュラム」（以下，コアカリ）で策定された内容を如何にして，確実に教育するのかであろう。要するに斉一教育の内容を統一するムーブメントである。もちろん，農林水産省が所管する獣医師国家試験があるので，その出題基準はあったが，このコアカリとは獣医大関係者が独自に考案し，世界の獣医学と比肩するものとすることを目的にしている。単なるかけ声ではなく，次年の入学者から全国16獣医大すべての学生に，コアカリ準拠の共通試験が課せられる。具体的な内容については公表され，かつ最新版は市販もされているので（http://plaza.umin.ac.jp/~vetedu/cur/），関心のある方は，そちらを是非，参照して欲しい。そのために，教員は指定された項目に沿った教科書を執筆し，授業内容の精査・再検討等で忙しい。特に日本野生動物医学会の教員は，従来の専門科目に加え（たとえば評者であれば「病態獣医学教育分野」の寄生虫病学；さらに同分野・魚病学の寄生虫関係もだが，このあたりの愚痴は別の所で），「応用獣医学教育分野」の野生動物学の準備もしなければならない。専門教員を新規採用したり，複数大学が共同課程を設け補完したりすれば，問題は解決するだろうが，評者のような下っ端が考えるような事ではない。まずはできるところから始めよう。

さて，コアカリ科目と指定されたので，教えないといけない！となった野生動物学の項目であるが，生物多様性，形態・生理，行動・社会，生態・生息環境，保護管理・個体群動態，救護・リハビリ，捕獲・不動化，保全医学と感染症，絶滅危惧種保全，動物園学，法制度・政策論，そして外来生物を含む。評者もこれに鑑み，担当科目（動物看護を含む獣医学群2年生共通科目「野生動物医学概論」）のシラバスに漏れなく記載した（もちろん，動物園学とあったのは「動物園水族館」とするなどマイナーチェンジはしたが）。しかし，限られた時間内では詳細に話すことはできないので，それぞれの項目に関わる基礎的な内容も網羅し，しかも最新情報に言及された自習用テキストあるいは参考書が必要になる。

今回紹介する書籍は，全ての獣医学徒（繰り返すが，コアカリなので野生動物に興味を示さない学生も含み，共通試験を受験）に相応しい。なぜならば，獣医学は，基本的に哺乳類に軸足を置く学問分野だからである。コアカリでは無脊椎動物や植物なども含む「野生生物」という用語を指定していたが，やはり，獣医学の性質からは，まずは哺乳類を全面に出した方が，断然，望ましい。そのようなことから，哺乳類に特化した類書は無く，本書は推奨される。本書は14の章からからなり，法体制を含む現状と今後などの全体的な概説を前後の4章に挟まれた各論が動物種別であり，次のような種が詳説されていた（記述別に列挙）；フイリマングース，アライグマ，タイワンザルとアカゲザル，ヌートリア，クリハラリス，シベリアイタチ，イエネコ，ノヤギ，クマネズミ。それぞれの種が具有する問題の所在が短く，それぞれの章のタイトルの副題的に添えられ，初学者にとっても親切であった。たとえば，フイリマングースの章には「日本の最優先対策種」とあった。ほかの種を対象にしていたものにとっては，ちょっとと思う読者がいるかも知れないが，発生している場の生物相と個体数，自然環境等を鑑みたら納得できよう。そのために，この章を執筆したお1人故・小倉　剛氏（本書編者の1人でもある）は全勢力を注いで，この動物と対峙した。残念ながら，本書が出版される直前，死去され，遺作となった。この本を学生達と読むたびに，今後もこの悲報を思い出すことになった。

ちなみに，評者がこれらの中で直接的・間接的に大きく関わった研究対象種としては，そのサンプル数の大きさ順に，アライグマ，クリハラリスおよびヌートリアで，特にアライグマは1995年以降，本書編著者である池田透氏と共同で大学が所在する石狩地方の個体を調べ，指導した学生には，複数の卒論テーマにしたもの，さらには博士号の学位を取得したものもいた。この動物が，今，十勝地方にも新たに分布するようになり，継続的に寄生虫を調べているが，そのような動物を扱うゼミ生にとっても，本書は重要な参考資料である。だが，（評者のバイアスのかかった見方をお許し下されば）概して寄生虫の情報が少ないのは物足りない。たとえば，ヌートリアではヒト・ウシ等に寄生し，公衆衛生・家畜衛生上，問題視される肝蛭が発見されている。また，少し調べて頂ければタイワンザル・シベリアイタチでも蠕虫の記録が散見される。次回，版を改めることがあれば追加を御願いしたい。また，（これも評者が居住するのでという偏向故だが）島嶼のクマネズミが取り上げているが，北海道の離島（渡島大島やモユルリ島など）のドブネズミについても言及して頂きたかった。それにしても，改訂がいつになるのか判らないが，追加すべき新たな外来種が日本の国土にこれ以上増えないことを望みたい。本書読後，一層強くそう感じさせた。